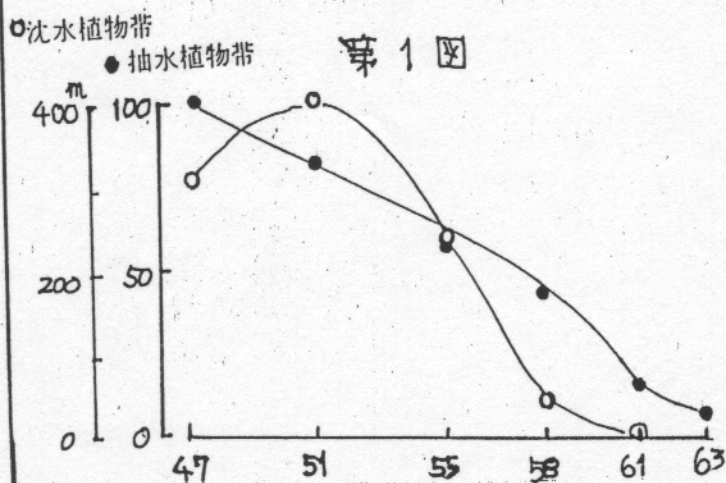


内水試 かわら版 105

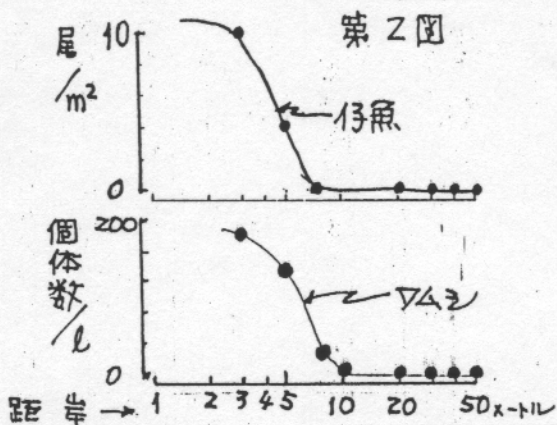
水生植物帯と魚類の生産

水温も15度近くまで上昇しフナやコイの産卵期を迎えようとしています。水生植物帯（藻場）がコイ、フナ等の産卵の場であることは誰でも知っていますが、最近この藻場が急激に減少しています。藻場は、普通、ヨシ、マコモ、ガマ等の抽水植物帯、アサザ、ガガブタ、ヒシ等の浮葉植物、エビモ、ササバモ、ヒロハノエビモ、緑色系状藻類等の沈水植物の3種類に大別でき、多くの場合、これらが一体となって湖岸帯に分布しています。玉造町高須地先の藻場を撮影した航空写真を利用して、

その減衰の様子を示したものが第1図です。ヨシ、マコモ等の抽水植物帯は、昭和47年の分布面積の10%以下にまで減少しています。また、ササバモ、エビモ等の沈水植物帯も昭和50年頃に、一時増えた後、急激に減少し最近では、船溜り等の特殊な水域を除けば、

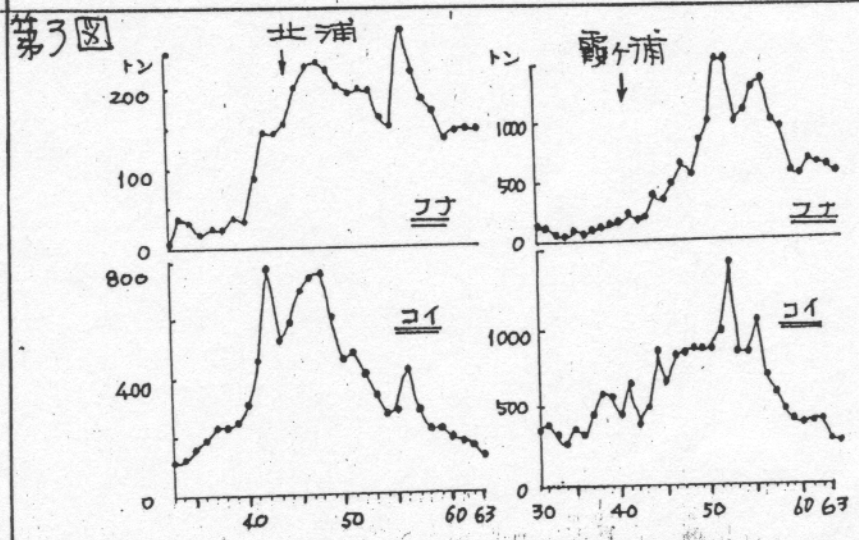
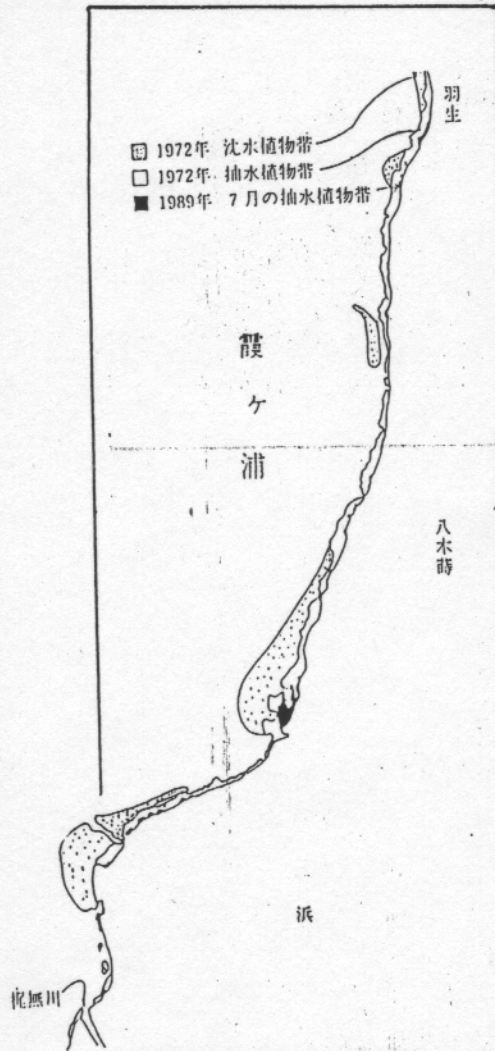


ば殆ど見られなくなってきたいます。藻場は産卵の場として、重要です。その他にも、稚仔魚の餌となるワムシ類が多く分布しており生育の場として重要です。第2図に現存する比較的大きな藻場（玉造町浜地先）の稚仔魚とワムシ類の分布の様子を示しましたが、両者の間に近似した関係が見られ、稚仔魚への餌料の供給の場としての重要性を伺い知ることが出来ます。霞ヶ浦北浦のコイ、フナの漁獲量の変動を第3図に示しましたが、コイ、フナの漁獲量は、いずれも最近、大きく減少しています。霞ヶ浦についてみると、この漁獲量の減少は昭和55年以降急激に減少しており、前述の藻場の減少と同じ傾向を示しています。当然のことかもしれませんが、このこ

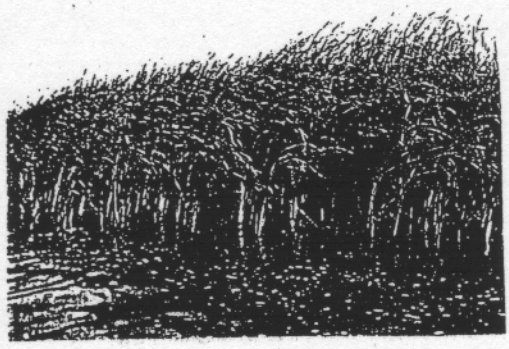


とがコイ、フナの漁獲量の減少に關係していることを示唆しています。以上のようには藻場はコイ、フナ等の生産にとって大切ですが、最近では水質浄化にとっても重要であることが指摘されるようになってきています。藻場の中の水質調査の結果を見ると、藻場ではアオコ等の有機物を効率よく分解され分解された窒素やリンは植物に吸

収されたり、脱窒（水中に存在している窒素がガスとなって空気に放散される現象）によって浄化されていることも分かってきています。ヨーロッパ等では、この藻場の浄化能力に着目して、積極的に植栽を行っている所もあるようです。霞ヶ浦北浦でも、これだけ藻場が減少して来ると、その自然浄化力も減少しているのではないかと考えられますから、水質浄化や緑の回復のためにも、湖岸帯の水生植物帯の復活が望まれるところです。



人事移動
 転入
 岩崎順 (水産試験場から)
 資源部技師
 根本 孝 (水産施設課から)
 庶務部主任
 小泉幸子 (鹵検定所から)
 昇格
 資源部長
 中村 誠
 転出
 資源部長
 小林 稔 (水産試験場へ)
 養殖部技師
 高島洋二 (水産試験場へ)
 庶務部主任
 石崎とみ (鹿行地区環境保全課へ)



2月					3月				
地点	水原	三又沖	白浜	馬渡	地点	水原	三又沖	白浜	馬渡
水温	9.8	7.9	8.9	9.2	水温	13.2	12.5	11.0	12.2
pH	7.5	7.6	7.7	7.5	pH	7.5	7.6	8.5	8.5
透明度	140	190	200	170	透明度	150	160	95	60
COD	4.5	4.7	4.5	3.7	COD	3.9	4.5	7.1	1.9
全窒素	1.38	0.97	0.91	1.10	全窒素	1.57	1.15	1.05	1.91
全リン	13	36	14	12	全リン	34	37	15	47
酸素量	10.2	10.6	10.2	10.0	酸素量	16.2	10.7	11.8	11.6
chl.a	17.4	16.0	10.6	32.3	chl.a	11.5	23.3	77.7	98.3